

付録 A: 魔物大鑑

円卓騎士異伝にどのような怪物を出せばよいものかと悩む方もおられましょうから、くさぐさの怪物について、アーサー王の時代では彼らがどのように存在していたか、どのように考えられていたかを解説いたします。

死せども死せぬもの

こちらでは、かつては人であった死者たちが、ふたたび動くようになった怪物を紹介いたします。

彼らの多くは生前の無念や、まだ生きたいといった深い欲望など、どうしてもない業によって動く哀れな罪人でございます。また、そうした無念を汲み上げた悪魔や異教の神が死者たちに偽りの命を与えて軍団とする例も、ウォーデンが死者たちを暴れさせるワイルド・ハントなどで知られております。さらに、ここに記すのも穢らわしいですが、外道に堕ちた魔法使いの中には、死者を玩弄し魂を縛る技をよく使う者もいるとか。

「土は土に、塵は塵に、灰は灰に」ではありませんが、あるべき姿に戻すのもまたひとつの弔いかと存じます。

モルダヴィア（東ヨーロッパ）には多くの“かつては人だったが血を吸う怪物に成り果てたもの”の伝承がございます。彼らは多くの怪物としか言いようのない力を持ちますが、それと同じくらい多くの弱点を持ちます。彼らこそ**ヴァンパイア**でございます。

ウィル・オ・ウィスプは鬼火の怪です。これにはその悪行で聖ペテロから人生をやり直すよう命じられ、それでも悪行をやめなかったので永遠にこの世をさまようことになり、悪魔から暖を取るために燃える石をもらったウィルという男の逸話がございます。その後のウィルはもらった火でもって人々を沼地に誘い込んで殺しておるとか。

アラビアには**グール**という砂漠に住み人の死体を喰らう化け物の伝承がございます。

死者が実体をともしない影のような存在になる亡霊の話は世界の至る場所がございます。**ゴースト**の伝説ですな。そして自分が何者であるかも失われた亡霊が**シャドウ**、救いの余地がなくなったさまよえる亡霊が**スペクター**であると考えられます。

戦場やその跡などの死体が多くある場所で動き出す死者の怪が**スケルトン**や**ゾンビ**でございます。

エジプトのファラオたちは死後の生を信じ、死体を保存させる術を編み出しました。それが**マミー**の始まりでございます。

死してなお生きるまじない師や魔法使いを指す**リッチ**は、元来はサクソン語にて死体を意味する言葉です。

レイスの語義は“出ざるもの”にて、死者から出てくる死霊のさまを表現しているのかもしれないせぬ。

ワイトとは死体に憑いてそれを操る悪霊でございます。

彼方よりのもの

人、否、かつて神と呼ばれていた巨人がこの世界の覇権を握るよりも遙かな昔、この世は我々の考えが及びもつかない怪物に支配されており、今の世は彼らが微睡んでいる間にのみ許されている夢のような時間であると、遙か彼方サナアの詩人は語りました。さてそのような戯言は置いておきましても、禁書、断章のたぐいで語られる、他に由緒の見当たらない存在に符合する怪物たちの一群がございます。ここではそのいくつかについて紹介します。

イングランド南部のエルトダウンには、坑道に住むとても臭いが濃厚な異形の妖精、**アティアグ**の伝承が残されております。

ゴート人の記した書物には、人の時代、巨人の時代より遙か昔、この世界の海に**アボレス**という怪物が都市を築いていたという戯言が記されておるものがあります。彼らは**チュール**という水陸両棲の兵士を擁し、水中に一大帝国を築いておったとか。その中では**クローカー**と呼ばれる巨大なコウモリのような、エイのような化け物や、鍾乳石の柱に化ける怪物、**ローパー**も彼らが生み出したとされています。

サナアの詩人が狂人の夢の中にしかおらぬであろうと書き残した怪物が、**ジバリング・マウザー**や**ウーズ**のたぐいでございます。これらは不定型の生命の素で、しかるべき命令を与えることでさまざまな形を取る奴婢のような存在であったとか。

この世をなすもの

ギリシアの哲人たちはこの世界を四つの元素にて説明しました。すなわち、火、風、水、土の組み合わせによってこの世は成り立っているというものです。そして、その伝統を受け継ぐ自然哲学者や魔法使いの中には、これら元素に生命があるかのように振る舞わせる術を心得ている者がごぞいます。

また、火山や大洋などある元素の存在が強い場所にはそれに近い性質を持った生き物がおることごぞいます。ここではそうした存在についてご説明いたしましょう。

インヴィジブル・ストーカーは、誰かを害そうとした魔法使いが喚起する風の精にごぞいます。無色透明ですからして、これ以上の暗殺者はおりますまい。

エイザーはドワーフによく似た鍛冶仕事をする火の精にごぞいますれば、彼らが火山などに馴染んだ姿なのかもしれません。

火、風、水、土の四元素に命を与えた傀儡が**エレメンタル**にごぞいます。哲学者や錬金術師の工房にはこのような存在がいるとかいないとか。

ガーゴイルといえば魔除けの石像ですが、土の精と契約して命を吹き込んであるものもごぞいますぞ。

伝説の中には火の中で生きる**サラマンダー**という生き物にごぞいます。火を勢いよく燃え上がらせる力も持つとか。

アラビアには**ジンニー**と呼ばれるさまざまな力を持つ強力な精霊がおりますして、ソロモン王に使役されていたことごぞいます。

ゾーンは奇妙な姿をした土の精でして、宝石と特別な関係があるとか。

マグミンは小さな妖精のごとき火の精にごぞいます。

元素を組み合わせさせて生み出される小鬼が**メフィット**ですな。好奇心旺盛で悪戯好き。使い魔のように使役されることもあるとか。

珍獣や幻獣

こちらでは珍獣、幻獣、あるいは魔獣と呼ばれる、なかなか見ることのできない獣を紹介いたします。

これらの獣がなぜ珍しいかは、とにかく数が少ない、生態がわかっていない、住んでいる場所が辺鄙であるなど、さまざまな理由が考えられますが、それはつまり、これらの動物を探すだけでも冒険行になるということごぞいます。

あるいは、牛や羊を襲う猛獣を倒したらこれらの獣であったという話にしてもよろしいでしょう。

アウルベア、ブレイ、ラスト・モンスターなどは、人の歴史が始まるより遙か昔に存在していた怪物という話にごぞいます。

ウィンター・ウルフや**ウォーグ**はスカンディナヴィアの伝承にごぞいます、神の血が混じった狼のことにごぞいます。知性を持ち、喋ることもできるとか。ウィンター・ウルフは自然の中でただ生きておるだけですが、ウォーグは狡猾で悪しき存在となっております。

エターキャップはサクソン語で蜘蛛頭という意味にごぞいまして、彼らやその祖先の見た怪物であるやもしれませぬ。

テュポーンとエキドナの娘が**キマイラ**でして、かの怪物たちの祖の娘ならば、自ら殖えてひとつの種族となるのも納得の話にごぞいます。ペリノア王が探索したうなる獣もこの仲間かもしれませぬ。

スカンディナヴィアの伝説が伝えるアイスランド近海で出現する海の怪物**ハーヴグーヴァ**は、山のごとき大きさを蒸気を吐き、多くの魚をひと呑みにしてしまう怪物で、**クラーケン**との関連が疑われます。**ドラゴン・タートル**の可能性もごぞいますな。

ヘロドトスの『歴史』などにも記述があるインドの北に住む鷲の頭と翼を持つ獅子が**グリフォン**でありまして、これが雌馬との間に子をなすと、鷲の頭をした馬の**ヒボグリフ**が生まれると伝えられております。

ケンタウロスはギリシアのテッサリア地方などに住んでおりました。彼らは好色で粗暴なもの、そうではない知恵者に分かれていたようです。

ゴーゴンはギリシアの怪物三姉妹として有名ですが、ギガントマキアでギガスに味方するために生み出された怪物とも言われております。この石造りの怪物はそちらでごぞいましょうか。

雷の落ちた地には新たな生命が宿ることがあるそうです。**シャンプリング・マウンド**はそのようにして生まれた植物の一種でしょう。

地中海沿岸の文化には人の頭を持つ賢い獣の伝説がもうございまして、ギリシアの人々はこれらを**スフィンクス**と呼んでおりました。エジプトではアネク神の似姿と呼ばれていたという話ですが、これですと**アンケグ**の姿も近そうですね。

ダークマントルなる怪物がいかなる来歴なのかは見当もつきませんが、大型のコウモリなどとはこのような生態を持っているやもしれませぬ。このような覆い被さる怪のより大きなものが**クローカー**にございます。擬態する怪物というくくりで語るなら、**グリック**や**ローパー**もこれの仲間でございますな。

タラスクはガリアのタラスコンに出て、聖女マルタに鎮められたという甲羅を持つ竜のことでございます。

かつて世界には巨大なトカゲの仲間がいたそうです。**ディノサウルス**はそうしたものらしいのですが、かようなトカゲがいたこと、にわかには信じられませぬ。

インドでは人の上半身と蛇の下半身を持つ**ナーガ**という神が存在するといひます。

アルゴ探検隊の冒険譚などギリシアの様々な物語には**ハーピー**という有翼の女人が出てまいります。

エチオピアのグハーン遺跡には芋虫のような怪物、シュド＝メルが住むと言われておりますが、それは**パーブル・ワーム**ではないでしょうか。

大プリニウスの『博物誌』によると、キンナイカ(リビア東部)には**バジリスク**なる蛇の王がおり、その眼力で人を殺したり石にしたりするとか。これとつがいになるのが**コッカトリス**で、ともにウィーゼル(イタチ)を嫌うとされています。

スコットランドの伝承にある谷や水辺に住む竜のたぐいには、**ビーヒア**というものがございます。

ヘラクレスが退治した多頭の蛇は**ヒュドラ**と申しました。

洞窟や森の奥には人くらの大きさになる巨大なキノコがあるとか。**ファンガス**もそうしたものです。

さて、世の中には精神の力でもって不思議なことをなす存在がおりまして、**フェイス・スパイダー**もそうした不思議をなす蜘蛛です。

クテシアスの『インド記』や大プリニウスの『博物誌』によると、インドやエチオピアに住む人の顔をして尾にサソリのような針を持つ獣が**マンティコア**だそうです。

クレタのパシパエ王妃とポセイドンの牡牛との間に生まれた子が**ミノタウロス**なのは皆様ご存じの通りかと。

アリストテレスは『詩学』において、^{ミメシス}模倣は人の本性から湧き出るものと説きましたが、してみるとこの**ミミック**という怪物は何なのでございましょう。

ギリシア神話ではゴーゴン三姉妹の末娘が**メドゥサ**とされておりますが、彼女もまたひとつの種族となったのでしょうか。

アイルランドの方では人の上半身と魚の下半身を持つ存在を**メロウ**と呼ぶといひます。

ギリシアでは夢魔の一種として**ラミア**が語られます。蛇との関連もあったはずでございますが。

マルコ・ポーロの『驚異の書』によれば、マダガスカルに巨大な翼をもった怪鳥、**ルフ**が棲息していたとか。

ジパングには山に巻きつく巨大なムカデの伝説があるといひます。**ルモアハズ**はそのようなものの一種でございましょうか。

巨人族

世界の様々な地に伝えられる巨人伝説は、かつて彼らがこの地上にもっと多く住んでいたことを雄弁に伝えております。彼らの多くは知恵や栄光を捨て、単独か少数で獣や隠者のように過ごしております。獣のように過ごす悪しき巨人はアーサー王の時代にも沢山おり、それを倒す話は騎士道物語の定番でもございました。

そして、狡猾さや栄光を捨てず、群れや軍勢のかしらとして君臨する巨人はより手強い敵となるでしょう。

知恵ある隠者として辺境の地にて海や山とひとつになって生きる巨人には、人が忘れ去ったり、いまだ人に知られていない知恵を借りに行ったりすることもございましょう。なにしろ、かつて彼らは神とも並び称されていたのですから。

その由来は定かではありませんが、**エティン**はその多頭が示すようにふたつの魂を持つとか。

かつてエトルリア（イタリア中部）で崇められていた神、オルクスは有力な巨人のひとりで、彼の眷族とされる巨人は**オーガ**、彼のしもべとなっていた妖精族は**オーク**など、それにゆかりある名で知られております。オーガはブリテン島を支配していたという不遜な伝説を持っていたため、ことのほかアーサー王の領地を侵していた様子です。

インドよりさらに東方のキタイやジパングより流れ来たオーガの変種には、**オニ**というものがおります。

人の世になって久しい現在でも、彼ら巨人族はアトラスの山々やオリュンポスなど神の座と崇められし頂には神を自認してはばからぬ**クラウド・ジャイアント**や**ストーム・ジャイアント**が、辺境の岩山にはその岩肌と同化したかのように古々しき**ストーン・ジャイアント**が、穏やかな田園地帯の古い丘には貪婪な食欲で辺りを食い尽くすこともある**ヒル・ジャイアント**が、溶岩が流れ出し火山弾を飛ばす活火山にはいつか地上を再び征服せんと欲望する**ファイヤー・ジャイアント**が、峡湾で入り組んだ霜と氷の地には勇猛な略奪者たる**フロスト・ジャイアント**がそれぞれ住んでおりました。土地の者からは神や悪魔として恐れられております。北欧で神々と崇められるアースやヴァンの悪魔も、おそらくは彼らやその祖先でございましょう。

このような上級の巨人どもは人里を支配したり生贄を要求したりして人々を苦しめるものから、隠者の如き生活で人と関わらぬようにしておるものなど、こうと言い切れぬくらい様々に日々の暮らしを営んでおります。

そうそう、アーサー王とコーンウォールの聖ミカエル山で戦った巨人コーモランは大食らいの逸話もありますし、いかにもヒル・ジャイアントでございませぬ。

スカンディナヴィアやオークニーには人をさらって喰らう**トロル**がおります。

人の造りしもの

ギリシアの哲人に連なる知恵者や錬金術師の中には、器物に魂のようなものを宿らせ、動かす技術を持ったものがあるとか。ここではそうした技術によって動かされているものをご紹介します。

こうしたものは魔法使いの館などで出会うことが多いでしょう。

アウェイクンド・ツリーや**アウェイクンド・シュラブ**は、ドルイドなどの魔法によって意志と動く力を得た植物にごぞいます。スコットランドのマクベス王が斃れる原因となったバーナムの森が動いた事件の裏には、これの使役があったとか。

アニメイテッド・オブジェクトは魔法使いが器物に霊を宿らせたり、騒がしい霊が器物を動かしたりする話としてよく語られております。

ユダヤのラビは儀式を行なって人形を作ることで命を与えることができると伝えられており、それが**ゴーレム**でございませぬ。なかでも主人を守るために作ったのが**シールド・ガーディアン**でしょう。

パラケルススが『ものの本性について』で**ホームンクルス**の作り方を仔細に述べておりますれば、この製法はギリシアの哲人たちにも伝わっておったに違いありません。

いと高さ処より

主や、これははなはだ疑わしきことですが異教の神々は、その力を地上にもたらすために輝かしい御使いを地上に送られることがあります。また、聖獣、神獣と呼ばれるありがたい生き物もございませぬ。

ですが、主のご意志を人が理解するのは難しきこと。聖書にもございませぬが、御使いたちは時に試練という形で人と対峙することすらございませぬ。それは人の身にとってまこと誉れではありますが、そういう戦いは多くのものを背負うことになるでしょう。

主の意志を伝えに下界へやってくる御使いが**エンジェル**でございませぬ。また、古き神々もウォーデンの娘たちが代表的でございませぬがエンジェルのような存在を使役しているとか。ですが、惑わされてはなりませぬぞ。

ペガサスはペルセウスが髪が無数の蛇でできた怪物、メドッサの首を刎ねた時にその血より出たとは有名な話でございませぬ。

クテシアスの『インド記』で紹介された角を持った馬の**ユニコーン**は、カエサル『ガリア戦記』でゲルマニアにも住んでいると書かれています。

竜

刃を阻む鱗と大空を翔ける翼、深遠なる精神を持つ竜は魔物の王者と呼んで差しつかえありません。彼らは人里離れた地に住む孤高の王者として、アーサー王の時代ですら既に数少なく、伝説の中にしか存在しないような種でございました。

アーサー王の到来を予言する魔法使いマーリンの逸話でも、ウェールズを象徴する赤き竜、サクソンを象徴する白き竜が現われ、今後の未来を暗示するなど、重い役割が与えられています。

さて、騎士の竜退治といえは聖ゲオルギウスに並ぶ武勲となるでしょう。ですので、皆様はよくお考えになって竜をお出しになりますよう。恐怖と畏怖をうまくかき立てた先にある勝利は、何にも代えがたい思い出となりましょう。

スードウドラゴンはとても小さな竜として、人に見つかりづらい場所にひっそりと住み、時に魔法使いの使い魔になっておることもございます。どちらかといえは妖精族に近い存在ですな。

色鮮やかな鱗を持つ**クロマティック・ドラゴン**は一般的には悪しき竜とされますが、ウェールズの赤き竜やサクソンの白き竜は特別な存在でございますから、例外としてウェールズ人やサクソン人を守護するものとするといえましょう。

金属の色に光る鱗を持つ**メタリック・ドラゴン**は一般的に善なる竜と言われておりますが、その善は数千年、数万年を生きる上での善ゆえ、今を生きる人々にとって必ずしもまったき善でなくなる瞬間もございます。そんな時に命を賭して諫めるのもまた、騎士や勇士の勤めでございます。

ワイヴァーンは獠猛な二本足のドラゴンとして、山に住んでまるで獣のように近くの動物や人を襲います。サクソン人はこれを旗印にすることもございます。

人に似たるもの

人の世が平らかになるまで、この地上には多くの種族がおりました。ですが、人が増えますと彼らはより穏やかに過ごせる辺境へと引っ込んでいきました。ここで紹介するのはそういう、アーサー王の時代となっては辺境で会えるかどうかも定かならぬ奇妙な人のような種族でございます。

さまざまな場所で書いておりますが、古代のエトルリアでオルクスに従っておりました妖精族が、現在オークと呼ばれる者たちの祖でございます。

洞窟に住む悪戯で銀を腐らせるという小妖精の一派には、コボルドというやからがございます。

ゴブリン、**ホブゴブリン**、**バグベア**は力を失いつつありますが現在もそれなりに多くいる妖精族で、人里離れた森や洞窟に住まうといえます。

洞窟に置かれたままの太古の日用品は、今もってそこに**グリムロック**などの存在が住んでいる証やもしれませぬ。

スカンディナヴィアの**ドワーフ**の中でも、地の底深くに住み、より魔法の力が強い者を**ドゥエルガル**と申します。また、同じように地の底に住む妖精族には黒い**エルフ**こと**ドラウ**という者たちもおります。ドラウの中でも魔法で異形と化した者を**ドライダー**と呼ぶとか。また、土の妖精**ノーム**にも、**スヴァーフネヴリン**という地中深くに住む偏屈な親類がおるとか。

海に出没する怪異なるものに、網にかかり漁師に助けを乞うて海に帰るような逸話を持つ海の司教という人のような形をした魚、あるいは魚のような形をした人がございます。これは**サファグン**や**マーフォーク**ではないでしょうか。叡智を持つ魚と人のような姿をした存在でいいますと、オアンネスやダゴンなど東方の悪魔たちも想起できますな。

キンナイカ(リビア東部)の聖人、聖クリストフォロスが犬の頭を持つマルマリテ族の出身だったという話がございます。、**ノール**と何か近きものがあるのやもしれませぬ。

スカンディナヴィアの狼に変化するウルヴァヘジンや熊に変化するベルセルク、狼に変身するネウロイ人など、**ライカンスローブ**と関わりのある伝承は数多くあります。キタイでは虎に変化する者、ジバングでは鼠に変化する者の伝承もあると伝え聞いております。

アテナイの王ケクロプスは半人半蛇と伝えられておりますが、人の世に紛れていた**リザードフォーク**はかような形で伝承されておるのやもしれませぬ。また、インドやキタイには蛇や蜥蜴の特徴を持つ人の姿をした怪異の伝承が多くあるとか。

墮ちたるものども

ここで紹介するのはこの世ならざる存在のうち、ときに悪魔や魔神と呼ばれる墮ちたるものたちでございませう。彼らは昔日の栄光を取り戻すため、あるいはただ歓楽のために人の営みを踏みじり、破壊をまき散らします。

彼らがこの世に顕現するのは強いものであればあるほど困難なようで、普通はインプやクアジットなどの弱きものが悪しき魔法使いの呼び声に応える程度でございませう。しかし、これを放置してえれば、その魔法使いは捧げ物や儀式を行ない、より強力な悪魔をこの世に喚起することでしょう。

サクユバス、**インキュバス**は夢魔として様々な物語に出てまいります。魔法使いマーリンの父親も夢魔だったとか。**ナイトメア**という馬のような姿をした夢魔は、まあ言葉をかけた洒落より出でたものでございませうな。

デーモンは今では悪魔と呼ばれ習わされている古き神々や諸力のうち、荒ぶるものたちでございませう。**デヴィル**は悪魔の中でも若干話が通じ、契約や神の威光によって縛ることができるものたちです。インプやクアジットなど低級の悪魔は使い魔として使役する者もおりますが、たかが小悪魔と侮っては自らを闇に落とすことになりませうぞ。

インドには獣頭の**ラクシャサ**と呼ばれる悪魔が住んでおると伝え聞きます。

ケルベロスやガルドム、ヘカテの獵犬など、世界の各地で伝えられる冥界の番犬は**ヘル・ハウンド**や**デス・ドッグ**だと考えられます。

妖精族

エルフやドワーフといった人に近い姿をした妖精族のありようは人の理にも通じるところがございませうが、より人から離れた心を持つ妖精もございませう。彼らとは話はできても通じなかつたり、曲解されたりしているように感じる者も多いとか。

これらの妖精は人と交じって暮らすものもおりますが、その多くは人のおらぬ場所にひっそりと集って暮らしていることが多うございませう。こうした妖精の集落を見つけて妖精をとらえ、一攫千金を狙う向こう見ずな若者は昔からずっとおりますが、そうした者は逆に化かされたり、妖精に憑かれたりしてとんでもない目に遭うと決まっております。もしかしたら、そういう哀れな者たちを一度叩きのめして正気に戻すような冒険がある屋もしませぬな。

ギリシアの伝説にある男しかおらぬ遊び好きな妖精が**サテュロス**でございませう。

スプライトとは小さな妖精族全般のことです。

ギリシアの昔から歳月を経た木には妖精が宿るといひまして、**ドライアド**がそれにございませう。木がそのまま動く**トリエント**でございませう。

ハグとは魔法を使う妖婆にございませう。ですが、しよせん人である魔女とは違ひまして、こちらは妖精なのです。この中には、かつては神と呼ばれていた異教の存在もいるとございませうぞ。

円卓騎士異伝・おまけ本

2023年08月12日(コミックマーケット102) 初版発行

執筆、画、編集、組版

ばらでいん

発行所

うなぎむら

Twitter :@nekohaus

印刷所

ねこのしっぽ

Web :<https://www.nekohaus.net/unagi/>

Mail :paladin@nekohaus.net

pixiv :1099435